

ほんものをみるって なんだろう

インフルエンザにかかっていたとき、布団を敷いて、ひたすら寝ていた。まだらに眠っていて、だるいなと思いながら目を開けると、飼っている白猫が枕もとに寄ってきていた。なに、と思うけれど、猫は私を枕の上からじっと見下ろしてくる。私をじっと見下ろしていたとき、この猫は、私を心配しているというより、食べようとしているのではないかと思った。そのくらいじっと見下ろされた。捕食される側になった気分で、

かわいい、というよりも、怖かった。猫は私のにおいを入念に確認すると部屋を出て行ってしまった。芦雪もこんなふうに猫をみたことがあるのかしら、と思った。
芦雪の「虎詣」には何度か出かけている。何度みても飽きないし、部屋に入った瞬間、飛びかかってきそうな虎に驚く。しっぽがくるりっと巻いていて、興奮して毛羽立っているのも、かわいい。一様な光のもとでも、スピード感がすごいから、蠟燭の灯りでみたりしたら、怖いのかもしれない。
無量寺までは遠いけれど、むっち

りとした蘇鉄に迎えられて、明るい気持ちにいつもなる。
芦雪の「虎図襖」の真裏に、猫が湖の中の魚をみているすがたが描かれているため、魚からみた猫は虎なのだ、という読み解きを読んだことがある。
江戸時代、何度か生きた虎が輸送されたりしているけれど、みな海を渡る前に亡くなってしまう。それに、生きて日本に着いたとしても、みられる人はほんのわずかだ。
絵師たちはどうやって虎を描くか、みんな苦心してきた。円山応挙は、虎の毛皮をみて実寸大にうつして写

生をしてから虎を描いたり、岸駒(※)は、虎の頭骨や足の骨を買って、測定しながら虎の姿を想像したりして、応挙よりリアルな虎の絵を描きたいと願っていた。当時の人にとって、幻獣に近かった「虎」を描くときの、アプローチの仕方の違いも面白い。
本物をみて気づくこともあるけれど、本物をみただけから描けるわけではない。芦雪は目が魚の目になれるくらいに、ものをよくみていた。
芦雪は虎をみたことがないことを、そしてお寺に来る人も虎をみたことがないことをわかったうえで、おかしく描いている。それらしく虎っぽ

くしないで、このすがたはまさしく虎でしょう、という瞬間を、すごいスピード感で描いている。猫が獲物を捕まえに行くときの緊張感のある毛の逆立ちや、おっきな前足の爪。猫は、獲物が油断をする一瞬をずっと待つことができる。獲物の方が疲れた弱みをみせた瞬間、すさまじい速度でとらえる。体がやわらかくて、俊敏で、音がない。
そんなしなやかな「大猫」のすがたに、見惚れる。

※岸駒
江戸時代中期から後期にかけて活躍した画家。迫力ある虎の絵を得意とした。



第 17 回 とら す ふすま 虎図襖 なが さわ ろ せつ 長沢芦雪

襖6面、紙本墨画 右2面 各180×87cm、左4面 各183.5×115.5cm
1786年 無量寺蔵(和歌山県串本町)
※新版教科書『美術2・3』の表紙に掲載

朝吹真理子
あさぶき・まりこ

作家。1984年東京都生まれ。
慶應義塾大学大学院
文学研究科修士課程修了(近代歌舞伎専攻)。
大学院在学中に小説を書き始める。
2009年、「流跡」でデビュー。
2010年、同作でドゥマゴ文学賞を最年少受賞。
2011年、「きことわ」で芥川賞を受賞。
著書に「抽斗のなかの海」「TIMELESS」など。